

会議議事録

議事記録者：鮭川幸乃

会議名	令和3年度 第2回学校関係者評価委員会
開催日時	令和3年12月14日 火曜日 18:30~20:00 (1時間30分)
場所	マロニエ医療福祉専門学校 3号館 視聴覚室
出席者 (敬称略)	<p>①評価委員</p> <p>北條 豊 (合同会社あゆみの森 代表社員) 川村 祐也 (医療法人常盤会 緑の屋根診療所) 須藤 智宏 (医療法人心救会 小山富士見台病院) 渡邊 芳江 (公益社団法人 栃木県看護協会 常任理事) 中里 佳純 (大澤歯科医院) 茂木 明男 (MO 後援会 会長) 日原 芳行 (マロニエ同窓会 副会長)</p> <p>(計7名)</p> <p>②学校教職員</p> <p>伏木克行 (マロニエ/小山歯科 校長)、宮内 修 (司会、マロニエ/小山歯科 統括部長)、 赤坂宏美 (統括部長補佐/助産学科長)、矢口 剛 (リハビリテーション学部長)、 今井貴子 (看護学科長)、金久保 浩 (介護福祉学科長)、栗田礼子 (歯科衛生学科長)、 絹谷幸男 (事務局長)、小林秀子 (学生サポートセンター長)、山田宏美 (広報課長)、 鮭川幸乃 (総務課)</p> <p>(計11名)</p>
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・令和3年度 第2回学校関係者評価委員 次第 (事前配布) ・令和2年度自己点検・自己評価結果改善現状報告 (事前配布) ・国家試験合格状況 (2020年度) 一新卒一 ・ビジョン教育の質<資格取得支援の強化>
進行 議題内容 各詳細は 別紙の通り	<p>1. 開会 (挨拶、配布資料確認) 開会が宣言された後、配布資料の確認と出席者の自己紹介を行った。</p> <p>2. 出席者紹介 (評価委員、学校教職員) 各出席者の自己紹介が行われた。</p> <p>3. 校長挨拶 伏木校長より開会の挨拶が行われた。</p> <p>4. 学校関係者評価の進め方説明 司会より、本会の進め方の説明が行われた。報告書は事前配布のため、その場での読み上げは行わず、内容に対する質疑応答を行う旨が伝えられた。</p> <p>5. 自己評価結果に対する改善と現状報告 質疑応答及び補足説明 報告に対する質疑応答及び補足説明が以下の順に進められた。(別紙1) 委員による下記以外のその他意見等は、別途「学校関係者評価報告書」に記載する。</p>

1. MO 後援会について
2. 学科懇談会・個別相談会の開催状況について
3. リモート授業について
4. 教員のスキルアップについて
5. 国試合格率（資格取得率）向上について
6. 学生への経済支援・学費の納入について
7. ボランティア活動について

6. 意見交換と学校関係者評価の総評

委員会全体を通しての意見交換が行われた後、伏木校長より総評が伝えられた。
(別紙1)

—閉会—

5. 自己評価結果に対する改善と現状報告 質疑応答及び補足説明

1. MO後援会について

【委員からの質問】

- ・MO後援会の位置付けについて説明を。(茂木)

【回答・補足】

MO後援会は、当法人と学生の保護者相互間の連絡を密にし、当法人の興隆発展に協力、協働することで、学生の心身の健全な発達に寄与するとしている。コロナ禍で制限があるが、日ごろから学生のために様々な提案や協力をいただいている。(小林)

2. 学科懇談会・個別相談会の開催状況について

【委員からの質問】

- ・MO後援会の要望に応じていただいた懇談会や、個別相談会に関し、開催した学科と開催できなかった学科があった。非開催の学科は、なぜ開催できなかったのか、またどうしたら開催できたのかの説明がほしい。(茂木)

【回答・補足】

例年6月のMO後援会の総会後に、全学科において学科別懇談会・個別相談会を実施しているが、今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防のため、実施を見送った学科があった(介護・看護)。特に人数が多い看護学科に関しては実習への影響も大きいことが考慮された。実施できなかった学科に関しても、年度当初より必要に応じて個別懇談を実施するとともに、文書で学生の近況と学校行事、さらに電話での個別懇談の案内をするなどの代替への対応をしている。(小林)

3. リモート授業について

【委員からの質問】

- ・外部研修やリモート授業の整備がされているようですが、実際に自分自身もウェブ会議を行う際に、出席者が多すぎると全体の把握、一人ひとりへのフォローが格段と難しいと感じました。学校としてその部分で配慮されていることはありますか。(日原)

【回答・補足】

看護学科は1学年80名なので全体の把握は難しい。今年度も2ヶ月程リモート授業を実施した中で工夫した点としては、Zoomのギャラリービューとスピーカービューを使い分け、可能な限り相互のやり取りに努めた。また、1人にかかる時間は短時間だが、講義中の質問でのやり取りなどで機会を作っていた。さらに、講義終了後に、時間内で質問できなかったことなどをチャットや電話で受けて回答した。それでも、全体的な把握は十分とは言えなかった。またリモート授業を実施する機会がある際に改善を図っていきたい。(今井)

4. 教員のスキルアップについて

【委員からの質問】

- ・多くの学科で教員のスキルアップを課題としていますが、具体的な到達目標などがあれば教えて

ください。認定〇〇や〇〇理論を学ぶ等、具体的目標設定があると良いのではないのでしょうか。
(須藤)

【回答・補足】

作業療法学科

各教員が博士号や認定作業療法士の取得を目指して励んでいる。また、一昨年から開始された新カリキュラムで教員も臨床の場での学びが求められていることから、実際の現場で患者さんと関わりを持ち、それらの経験を教育に還元している。(矢口)

理学療法学科

新カリキュラムの対応の一つとして「臨床実習指導者講習会」を教員が中心となって運営しており、講師もしくはファシリテーターとして役割を果たしつつ勉強している。

他にも、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会への参加や、障がい者スポーツ指導員(初級)養成講習会の受講をしている。(矢口)

看護学科

栃木県看護系教員協議会の専任教員のキャリア別達成目標を参考にキャリア別に習得できるようにしている。

月1回の栃木県看護系教員協議会の領域研修会や、年に2回ある学生指導の注意点やカリキュラムの構築などの研修を受講している。また、各教員の担当領域の業者の授業研究やカリキュラム、実習指導の在り方などのセミナーに参加し、皆で共有できるように報告している。(今井)

歯科衛生学科

教員の資質の向上として、学科内での学習会を開始。

1回目は「欠課が多い学生の対策について」、2回目は「対応の難しい学生について」ご教授いただき、学科内で闊達な意見交換を行った。

また、今年度は栃木県歯科衛生士会主催の研修に参加した。(WEB視聴)(栗田)

- ・その他法人全体として国家試験対策委員会、IPEなど学内研修も盛んに実施している。今後は学生の社会人基礎力や教員の学生対応力を向上させるためのグループワークを予定している。
(宮内)

5. 国試合格率(資格取得率)向上について

【委員からの質問】

- ・資格取得率の向上に努力されている点は評価できますが、数値がどのくらいアップしているのか、成果の可視化をお願いしたい。(渡邊)
- ・それぞれが課題について一定以上の成果をあげていますが、例年に比べ資格取得率の評価が低くなっている科が多い理由は何でしょうか。(日原)
- ・改善策、取組みは進んでいると思うが、もう少し詳しく説明を。(茂木)

【回答・補足】

- ・資格取得率の数値の可視化について

学校ホームページの「情報公開」に掲載するとともに、内部では年度初めに前年度の国家試験結果(受験率、合格率、全国平均等)を一覧にし、共有している。

・資格取得率の評価の数値について

①自己評価の客観性

本校では全学科において国家試験合格率の目標を「全国平均値以上」としている。

自己点検評価において、昨年度の各学科の合格率と全国平均値を比較した結果、その差異により点数も変化します。今年度は諸学科が他学科と比較し客観的に評価したことで、数値に変化が生じたと思われる。

②受験率の維持向上と留年防止対策との影響

本校では、可能な限り修業年限での卒業を目指し、受験率の維持向上と留年防止に努めている。

卒業と合格の両立が難しい学生が、受験はできるものの国家試験合格まで至らない状況も生じている。

・資格取得向上に関する改善策・取り組みについて

今年度、全学科が参画する「国家試験対策委員会」を立ち上げ活動してる。これまで学科内で完結していた国家試験対策について、互いの悩みや支援の方法を知ること、これまで以上に対応の幅が広がっていくと考えている。今年度は全8回を予定しており、第4回まで開催した。専門学校として資格を取得させて社会に送り出すことは至上命題であり、学校全体が一丸となって、一人でも多くの資格取得を目指していく。(赤坂)

→教職員がジレンマを抱えながらも様々な努力をされていることがわかった。しかし、合格しないことには臨床現場には出られない。既卒の合格率は低く、新卒でいかに合格させるかはどの学校でも抱えている問題である。学生が資格取得すること＝教員の質の向上であると思うので、ぜひ一人でも多くの学生が合格できることを大切にしてほしい。卒業時に成績がギリギリだった新人も、臨床現場で育ち、2～3年後に中堅クラスとして活躍していることもある。(渡邊)

→新卒で合格することの重要性は委員会でも初回で共有しており、教員が国家資格を持つことの価値を学生に伝えることでまずは合格へのモチベーションを持ってもらうことが大切だと思っている。そのため教員の意識から見直しを図っている。学生が苦しい時も伴走して支え、一緒に持久戦を乗り越えられるような教員を目指していきたい。(赤坂)

卒業までに留年する学生は合格が難しい傾向にある。合格率を上げるための対策の一つとして現在委員会では留年生の対応に重きを置いている。(宮内)

→学生数が年々少なくなってくると、学校側としても経営を成り立たせるため入学する学生の基準を下げざるをえない状況がある中で、合格率を上げるというのは大変なことであり工夫されていると感じた。実際入学してくる学生のレベルはどのように変化しているか。(日原)

→極端ではないが全体的に下がってきている。今まで専門学校に入学できないような子も入ってきている現状はある。(宮内)

それでも医療系を志している高校生は他の同じような成績の生徒と比較して意識は高い傾向にあり、入学してからは教員がいかにモチベーションを維持向上させるかが課題となる(伏木)

→保護者の立場としては、国家試験の合格率を見て学校を選んでいる。ここに進学したい、させたいと思わせる学校であってほしい。18歳人口は減少しており、2030年には栃木県は15～20%子どもの数が減ると言われている。大学の進学率が高くなっている昨今でより優秀な入学生を獲得するためにはやはり国家試験の合格率を上げる必要がある。私の聞き及ぶところでは栃木県内で

は高校生からのマロニエの評判は良い。合格率をあげることでさらに右肩上がりに学生数を確保でき、学生数の確保もまた合格率につながるだろう。(茂木)

6. 学生への経済支援・学費の納入について

【委員からの意見】

- ・コロナ禍で困窮する学生が出た場合の対応は。
- ・学費納入が遅れる学生が出た場合の対応は。

【回答・補足】

- ・コロナ禍で困窮する学生が出た場合の対応としては、例年年2回の定期採用だった日本学生支援機構の公的奨学金が、新型コロナウイルス感染症の拡大により、常時採用しているため案内・取次をしている。また、状況によっては、他の給付型奨学金等の取得も推奨するなど、学生の状況に応じた個別の対応を強化している。(小林)
- ・学費納入が遅れる学生が出た場合の対応は以下の通り。

【納入期日までに、ご連絡を頂いた場合の対応】

- ①期日から1か月以内に納入可能であれば、納入を猶予する。
- ②一括納入が難しい方は、分割納入の相談を受け付ける。(年度内に全額納入)

【納入期日までに、ご連絡がなかった場合】

- ①学生さんや保護者様に連絡を取り、支払い可能な方法を検討していく。

例：各種奨学金案内のため、学生サポートセンターへ誘導

国の教育ローン等公的に利用できる支援策の案内 (鮎川)

→現時点でこのような対応を行っている学生はいるのか。(茂木)

→コロナ禍を理由とした奨学金の増額希望等が数名ある。(小林)

連絡をいただいて分割対応をしている学生も数名いる。(鮎川)

7. ボランティア活動について

【委員からの意見】

- ・コロナ禍でむずかしいと思いますが、ボランティアの内容について、コロナ前とどんな変化がありましたか。(日原)

【回答・補足】

本法人は、福祉医療分野の学校を有しており、外部からのボランティア依頼や活動もその分野に関係するものがほとんどである。

コロナ禍により感染症の蔓延防止対策として感染経路を断つためとのことで、例年 60 件程度依頼のあったボランティアは、昨年度から 3 件程度とほぼ皆無となった。学内で完結できる地域清掃活動などは、積極的に継続して実施している。(小林)

→介護福祉学科ではボランティアの参加時間によって単位を認めるものがあったと思うが、そちらに関して何か変化があったか。(日原)

→年間 30 時間以上のボランティアで単位を認めているものがある。コロナ禍でも規程は変えていない。継続して依頼いただいているところに学生を派遣している。本来なら自主的に行った方が良いが、ボランティアの経験も大切ということで学生に受けさせている。(金久保)

6. 意見交換と学校関係者評価の総評

—意見交換—

- ・【渡邊】 コロナ禍で実習が十分にできないまま卒業した学生から、現場に出てからの悩み相談など受けることがあるか。また、どのような内容か教えてほしい。

→理学・作業

現場にご協力いただき、ありがたいことに昨年度は半分程度、今年度はほぼすべての実習を実施できている。昨年度卒業した学生からは、一度でも経験できたことが大きかったようで、実習をほぼ経験できなかった同僚と比べると、導入としてやりやすかったと聞いている。

(矢口)

助産学科

昨年度もほぼ実習は実施できている。しかし、通常 10 例程度という縛りが緩くなったこと、更にお産自体が少なくなったこともあり、7~8 例程度で卒業した学生が多かった。

現場に出てからは、就職先のご努力で入職後の研修期間を長く取って下さったところが多く、中には他の病棟をまわったあとで産科病棟に配属された場合もあり、むしろ新人同士の繋がりが他部署との連携の芽が出ていることもある。他の病棟のことを知れて良かったという声も聞こえてくる。現場側が定着していくための工夫をしてくださっていると感じる。(赤坂)

看護学科

学科長として就任 1 年目なので、前任校とマロニエの状況どちらも説明させていただく。

前任校：現場での半分程度で学内実習の経験を多く積んでいた。現場において十分研修を行ってから配属されていたようだが、リアリティショックが大きく離職は比較的多かったらしい。

マロニエ：実習指導者会議で何う限りでは、看護師長が学校の状況を良く理解してくださっており、大事に育てようとしてくれている。卒業生もむしろ危機感が高い学生が多かったようで熱心に研修を受けている。離職は例年程度。(今井)

→なかなか集合研修ができず、学生時代のことをいかせないとの声も聞こえてくる中、お話を聞いていて現場によって温度差があるのかもしれないと感じた。(渡邊)

- ・【茂木】 離職について、懇談会でもお話ししたが、3 年以内の離職率を追えていないと聞いている。3 年以内の離職というのは、病院奨学金の返済免除条件に反し、返済義務が生じてしまうことに繋がる。そのような卒業生がどのくらいいるのか、数字を学生や保護者に示すことで病院奨学金を利用する学生への離職防止のアプローチの一つになるのでは。離職率をしっかりと把握して、現状を学生に伝えることで社会に出てからも離職しないという強い意志を持って働ける社会人になるのではないか。

→おっしゃる通りで、辞めない学生を育てるというのも学内研修で取り上げている学生の社会人基礎力の向上の一面である。そのためには現状を知る必要があると思うので、調べて数値を追っていききたい。また、病院奨学金の視点はなかったのであわせてみていききたい。(宮内)

- ・【渡邊】 社会人基礎力の話があったが、現場からも重要視されている。臨床の課題でもあり、難しいと思うが、将来自分が目指す職業人はどのようなものなのかを入学時から動機づけし、進級と共に描くキャリア像が固まると良いのではないかと。
- 1年次のモチベーションは大切で、どのように持っていくかで方向性が決まる。1年次から理想や夢、ビジョンを持たせることができるかは教員の質にも関わってくる。(伏木)
- 後援会で各学科の教室・施設を見学させてもらったときに、コロナ禍で例年通りの授業が困難な中、矢口先生が学生の興味を引けるよう工夫して授業を行っている様子を伺った。学生のモチベーションをあげるために尽力されていて非常に素晴らしいと思った。(茂木)
- 病院付属の養成校と比較すると当校の職業人としての教育は若干弱いと感じている。基本的な報連相をはじめとした社会人医療人としての自覚を促すような指導や教材を考えていきたい。(今井)
- 現場の各層の研修プログラムでも社会人基礎力は取り入れていると思うが、向上には時間と労力がどうしても必要なため、医療機関によっては安全に医療を展開するための技術やフィジカルアセスメントが優先されてしまうこともある。しかし、現場からも社会人基礎力向上のための研修プログラムを取り入れてほしいといった声も上がっており、悩みどころでもあることがうかがえる。人を相手にするからこそ、その部分は職能団体としてもフォローアップしていきたいと思っている。(渡邊)
- 社会人基礎力の向上とは具体的に何をすれば良いのか、学校としても教育の質の向上として一番悩んだところである。今見えてきていることとしては、やはり入学時の動機づけが大切ということで、教員や卒業生から専門職の学び方や魅力などをレクチャーする場を設けるということを構想している。
また、在学中にあいさつや返事など基本的なことを身につけることで、職場に受け入れてもらいやすくなり、定着し結果的に辞めないという図式になるよう、学生に働きかけていくシステムを作っていきたい。(赤坂)
- 現在採用担当をしているが、ここ3~4年既卒の方に見られる傾向としては、向上心が年々減っている、利用者さんとトラブルになってしまうということがある。職種に魅力を感じられない、将来のビジョンを持っていない人が増えてきた。
教員が学生に対して職種の魅力を語るという取り組みはとても良いと思った。(日原)

—総評—

本日は貴重なご意見ありがとうございました。外部からのご意見は財産ですので、それを糧として地域の医療福祉に貢献できる人材を輩出できるよう努めてまいります。

また、教員の質向上、学生へ専門職の魅力を伝えるなど一つの形が見えてきたように思います。

医療福祉の現場でも重要とされている“連携”、現場施設・学校・学生・保護者と連携してより良い方向に持っていくことができたかと存じます。これからもよろしく願い申し上げます。